

## 18. 窒息・誤嚥を防ぐための自部署の振り返り

施設名 社会医療法人三和会介護老人保健施設ライフケアながやま

看護師 西森由里子（にしもりゆりこ）

共同発表者 安枝三恵 中野真雄 西川ひとみ

---

### 【はじめに】

当施設の誤嚥ハイリスク者は、アルツハイマー型認知症（以下、AD）が最も多い。認知機能障害の進行があるにも関わらず、食事は自立して摂取している方が多い。しかし、利用者の姿勢の傾きや食物を口腔内に溜め込んでいる等のヒヤリハット報告は提出されておらず、職員間の共有に至っていない。当施設の誤嚥ハイリスク者の今後の対策に繋げていくため、自部署を振り返り調査したことを報告する。

### 【目的】

職員の誤嚥ハイリスク者の摂食嚥下障害に対する危機意識を高める。

### 【調査対象】

インシデントの発生率が高かった3ヶ月間の誤嚥ハイリスク者

### 【方法】

過去に発生した窒息・誤嚥のインシデントについて摂食嚥下障害を調査する。

### 【結果】

対象者は介護度4以上62.5%、認知症分類Ⅲa50%、Ⅳ37.5%、Ⅲb12.5%、認知症別誤嚥ハイリスク者の割合AD50%、レビー小体型認知症（以下、DLB）37.5%、脳血管性認知症12.5%。ADの中期50%、後期25%であった。過去3ヶ月間のインシデントでは、レベル0が4件、レベル2が1件、レベル3bが1件、レベル5aが1件であった。職員は誤嚥ハイリスク者が摂食・嚥下障害があるにも関わらず、ヒヤリハットに上げていなかった。介助者が増えた事により、職員の人手不足に加え観察が十分に出来ていなかったためであった。レベル3bはADの誤嚥ハイリスク者で、自立して摂取していたが食物を詰め込み窒息するケースが起きた。レベル5aはDLBの誤嚥ハイリスク者であった。

### 【考察】

対象の利用者は、誤嚥せず食物を口腔内に溜め込み、嚥下が出来ない状態であっても、むせる事がなかった。誤嚥の兆候に気づくまでに至らなかったのは、職員の危機意識不足があったためと考える。中核症状による誤嚥や窒息のリスクが生じるという知識不足があり、ヒヤリハットの提出に繋がらず職員で共有が出来ていなかった。食事への興味を失い進行すると、覚醒レベルが低下し窒息・誤嚥に繋がるため、介助者に対し嚥下状態を確認しながら咀嚼運動を促すという誤嚥ハイリスク者に対する食事ケアの技術が不足していたと考える。

### 【まとめ】

認知機能障害の進行と共に摂食嚥下障害は重度化していくと述べられている。対象者の状態は日々変化するため、対象者の日頃の状態を知ることが大切である。対象者の個別性を重視した関わりを視野に入れ、多職種協働で誤嚥の兆候を共有出来る体制を整え、ヒヤリハットの活用を啓発していき、窒息・誤嚥の低減を図りたい。